

火野葦平
『糞尿譚』
小論

荒木優太

一、貨幣の貨幣

「彦太郎は糞壺の縁まで来ると、半分は埋められたが、残りの半分に満々と湛えている糞壺の中に長い柄杓をさしこみ、これでも食えと、絶叫して、汲み上げると、ぱっと半纏男達へ振り撒いた」。第六回芥川賞を受賞した火野葦平の『糞尿譚』（『文学会議』昭和一二・一〇）、糞尿汲取事業に取り組んできた本作の主人公は、仕事仲間から騙され、失意の末最終的に集めてきた糞尿を自身を馬鹿にする部落民を成敗する武器として使用する。何故、糞尿は武器になるのか。勿論、汚いからだ。しかし、憤怒で我をなくした者にとっては、糞尿の忌避感はその次となり復讐心が先立つことになる。実際、「柄杓から飛び出す糞尿は敵を追い払うとともに、彦太郎の頭上からも雨のごとく散乱した」けれども、彼は「自分の身体を塗りながら、ものともせず」平然と敵に立ち向かう。忌避感を克服した者にとって、糞尿を畏れる理由は存在しない。それ以上に、彼は「自分の力に対する信頼のため、次第に胸のふくれ上って来るのを感じ」てきてさえいる。

果たして彼の「自分の力」とは何なのか。テキストのなかで、金策に奔走する姿が印象的な彦太郎は、実直で人は好いが、頭の回転が早いようには描かれていない。例えば、出された書類の文面を確かめもせず、それが自分の事業の利益を横取りされる書類であることも知らずに捺印してしまう。素朴に考えれば彼は、無能だ。実際、多くの村人は糞尿処理という汚らしくみえる職業柄もあって彼を馬鹿にし続けている。

しかし少なくとも、彦太郎にとって糞尿は単に、汚いと言って済ませられるような代物ではなかった。『糞尿譚』というテキストにあって、特に彦太郎に対して元々糞尿は貨幣を象徴していた。というのも、それは農家に「肥料」として売れるからだ。彦太郎の生家である小森家は元々、坂田村の豪農として何代も続いた由緒ある家だったが、現在は凋落し、それを食い留める為に、彼は糞尿輸送に（馬車や牛車ではなく）トラックを使用し、汲取人夫を雇って近代的な「糞尿汲取事業」を新たに始める。貨幣としての糞尿、これは転倒的な事態だ。本来的に考えてみれば農家にとって糞尿は、「肥料」という形で先ず第一に食物を象徴すべきであるのに対し、興味深いことに「豪農」の倅である彦太郎は自身で糞尿そのものを使用することなく、貨幣に交換すること、そして「事業」を円滑に回転していくことを至上の目的としている。マルクス主義のタームでいえば、使用価値ではなく交換価値が重視されているといえるだろうが、実際、糞尿が貨幣交換体の役割を果たすのならば、彦太郎にとってそれは貨幣の貨幣、貨幣を買うための貨幣と化している。

農村世界を資本主義的に再利用しようとする企図を持つ者は、そこが、資本如何によって伝統なり血縁なりとは無関係に大地が土地として売買されうる世界でもあることを自覚せねばならなかった。「彼が十年間に、先祖から残されて来た山林田畠はもとより、家屋敷まで悉く人手にわたり、あるものとは、ただ、今に見て居れ、という彦太郎の執念ばかりとなつた」。糞尿が単なる貨幣ならば、それを長らく受容してきた大地も潜在的な貨幣に等しい。糞尿-大地-食物-糞尿...の農村的循環は貨幣の流れの介入によって寸断される。それは彦太郎にとって家族との寸断でもあった。「彼は村にも家にも帰れなくな」り、「海浜に近い野原の片隅にトラックを入れるバラック小屋を建て、その横に四畳半の一部屋をこしらえて其処に起き臥し、不自由な自炊をした」。時折家に立ち寄っても、妻（とし）と二人の子供との不通感は拭えず、分断状態が回復する見込みもない。先祖からも家族からも遠ざかって彼は孤立する。

彼に残されてるのは貨幣としての糞尿とそれが奉仕する「事業」だけだ。しかしながら、回収した糞尿の全てを換金できるのではない。糞尿の中には（小学校のものなど）栄養のないものも多くそれは、「唐人川尻、並びに、各所に穴を掘って蓄置きする」。しかし、そこで相克が発生する。唐人尻下流には、明治初頭頃コークス工場ができた折、そこに勤めたフランス人技師が川で砂金が取れるというデマを流した結果集まってきた「部落」語り手は「ドノゴオ・トンカ」（＝黄金部落）とも呼ぶ、因みに火野は後年同じ場所を舞台にした小説『黄金部落』（昭二四）を書いているがある。部落民は砂金採取がデマだと分った

後もそこに居残り続け、「金を採るかわりに塵芥を取る」ようになった。つまり市内のゴミ処理を引き受けて生活するようになったのだ。糞尿汲取と塵芥処理という、一見同族の二つの職種はしかし似たもの同士である為に却って鋭く対立する。つまりは、市予算の「糞尿汲取請負賃」と「汚物搬出馬車請負賃」の配分によって、利害が直接ぶつかり、その上、下流が値打ちのない糞尿の捨て場所にさえ指定されるのだ。部落民たちにとっては黙っておくことはできない。

二、「境界のあいまいさ」

池田浩士は部落民を「内部の敵」と呼んでいる（『火野葦平論』第五章、インパクト出版社、平一・二・一）。確かに、糞尿処理もゴミ処理も、大局的に見てみれば大差なく、闘争がその「内」側でなされるのであれば、その形容は間違っていない。ついでにいえば、彦太郎は最終的に親身になっていた（彦太郎と同じく土地の有力者である赤瀬春吉に援助してもらっている）阿部丑之助に裏切られ、事業の権利を横取りされる形になるのだから、「内部の敵」は彼にも呼称されるべきものだろう。しかし、そもそもその内外の線引きは確定された前提なのだろうか。寧ろ、このテキストが前提にしているのは、内と外を巡る境界画定の困難さではないのだろうか。

井口時男は、『糞尿譚』の「解説」で、糞尿が「つい今しがたまでわれわれの一部だったもの」、「自己と自己ならざるものとの境界のあいまいさそのもの」だと指摘している（『糞尿譚・河童曼荼羅（抄）』、講談社文芸文庫、平一九・六）。主人公にとって、そして当然このテキストにとって、糞尿が特権的な象徴であることは明らかであるが、だとしたら、テキストが呈示する世界全体も又「境界のあいまいさ」と無関係であることはできない。実際、部落を「内部の敵」と性格付けることができるのであれば、離れて暮す妻と子を味方の外化の現象と捉えることもできるだろう。ウチ（内＝家）の財産だった大地も又同様の状況だ。

内外が曖昧となった『糞尿譚』の世界では、逆に、本来はウチでも何でもないものが内的なものとして侵入し、それへの配慮が不可避免的に求められもする。それがよく現れているのが、主人公を取り巻く政治的背景だ。彦太郎はその土地を政治的に支配する民政党に「親父がそうであったから」という理由で長年所属し、選挙応援などをしてきたが、事業に対して何の援助もないことに失望を感じて脱退し、同じく党には属していない土地の有力者である赤津春吉から金銭的援助を受けた。家の紐帯が寸断されるに従って、一見父子伝来のその結びつきも希薄になるように見えたが、しかし、彦太郎は解放されない。土地の新聞記者は赤津との結びつきを攻撃的に問いただし、「政党とかなんとかそんなことは糞くらえだ」という彦太郎の言葉を取り上げそれを民政党の友田喜蔵に伝えたと脅す。彦太郎は脅迫に屈し、「どうぞ、内密に」と言って口止め料として十円紙幣を払ってしまう。外に遠ざけたものがいつの間にか秘密を介して内部へと巻き込みこまれてしまう（「内」密）。脱退した彦太郎にとって、民政党は外部の、何の関係もないものになる筈だったのに対し、内が外に流出していくのと同じく、外へ遠ざけていたものが内に逆流してきてしまう。それが『糞尿譚』の世界なのである。

ところで、秘密を漏洩させないために、彦太郎はせっかく稼いだ貨幣を無為に支払う訳だが、元々、部分的な秘密を占有できることは彼の職業的特性の一つでもあったことは注意してよい。どういうことか。阿部との宴の席で自分の仕事を反省して彦太郎が語る処によれば、無数の便所を遍歴した彼からみれば「便所の汲取口というのも千差万様で、みんな特徴があり」、「変な人の秘密がわかったりして、中々面白い」。便所の中には様々な人々の私生活の痕跡が残されている。「女のある家に赤い紙が落ちていたり」、「サック〔＝コンドーム〕が棄ててあるところがあり」、「いろんな手紙だとか、へんな妙なものが棄ててあり」、「便所の中へ棄ててさえおけば、誰も知らないと思っているのが面白い」。だから彦太郎にとって便所は他人の秘密を覗き見することができる特権的な場所となる。ここから既に忌避感克服の準備が始められている。糞尿は多くの人々にとって単に汚いものだが、家族と離れ離れになった彦太郎だけには、逆説的なことに別の家の内部へ侵入する「面白」さを提供するものに見えるのだ。だからこそ、憤怒はきっかけに過ぎない。

重要なことは、この特権性を担保しているのは場所性それ自体というよりかは寧ろ、経験を通じて一見皆同じに見える便所の差異を識別することのできる職業的熟練であり、それこそが便所という場所に積極的な意味を与えているということだ。糞尿は第一義的に貨幣を象徴していた。しかし、彦太郎の経験値が

加わったとき、糞尿は他人の秘密、いくなれば外から内へと密通する隠し穴を確保してくれるものとなる。ここにあって、象徴的貨幣としての糞尿とは別物の糞尿の価値が見出されている。というのも、糞尿はもはや先延ばしされた貨幣交換のために価値を帯びる訳ではなく、経験値を通じ、それ自体において他人の生活の徴を知らせてくれる手段として見做されるからだ。それは翻って、自身の仕事が未来の「事業」の成功如何に関わらずに発揮される「自分の力」の発見に繋がっていく。繰り返すが、彦太郎に「秘密」を与えるのは、彼の不断の努力と経験によるのである。

三、長久命の長助

『糞尿譚』世界の「あいまいさ」は、糞尿の第一義的だった筈の貨幣的な象徴性に揺さぶりをかける。つまり、「あいまいさ」は、彦太郎に部落民との相克や党派への配慮といった雑事を科すが、他方で糞尿を私生活の痕跡が混雑している「面白い」特別な記号として発見させもする。そこから、彦太郎は糞尿を介しつつも貨幣に縛られていない、獲得した能力を翻って体得することになる。即ち、長年の経験の末に獲得しえた、「面白さ」の解釈を見出しえる便所なり糞尿なりへの分析眼、「自分の力」である。「あいまいさ」は曖昧故に両義的に働く。そして、その二つの意義のバランスがこのテキストに緊張を与えている。貨幣に侵食されていた糞尿から、糞尿そのものを奪還すること。混合し入り乱れる汚物のなかに有意味な記号を発見し、「内密」を買うのではなく自身の力で掌握する力をもつこと。或いは次のようにも言い換えられるだろう。つまり、『糞尿譚』とは全ての境界線が混沌として、大事なものは離れていき、邪魔なものが近づいてくる世界のなかで、恃みにできる「自分」というものを立ち上げていく過程の断片をスケッチしたテキストであるのだ。

だからこそ、最後の場面の彦太郎の振る舞いは、自身が今まで行ってきた糞尿を貨幣に換える仕事を象徴的に否定する行為として解釈されるべきものだ。彦太郎の仕事は、糞尿の処理というよりも、より厳密に言えば糞尿を回収し、それを適切な場所へ分配することで賃金を得ていた。分配はこのテキストを読む際の鍵概念だ。回収した糞尿の分配は勿論、市によるゴミ処理賃と糞尿処理賃の分配、結果騙されてしまった彦太郎と阿部（そして赤瀬）との事業利益の分配など、あらゆる相克が分配の問題から始まっている。これに対し、最後の場面では適切な分配などという概念は無視して処構わず我彼問わず糞尿を撒き散らされる。この糞尿はもはや貨幣に従属しない。貨幣としての糞尿に反旗を翻す糞尿だ。そして、その価値の一端に触れていた彦太郎が、余剰としての糞尿を忌避する筈がない。

彦太郎は糞尿を撒き散らしながら、「寿限無」の小唄に登場する長い名前を何度も絶叫しながら唱える。彼は村人の多くから馬鹿にされ、本編中では部落の子供にさえ事業一心の姿も揶揄され「バカノヒトツオボエ」と悪口を落書きされる。けれども、それでも彼は本気で怒ることがなかった。それは唯一の特技として「寿限無」の小唄の「長久命の長助」の長い名を「何時何処でも、いくら酒に酔っていても」諳んじることができるために、「人が彼を低能などと罵ることがあっても、自分は決して頭が悪くないと自負」するようになったからだ。「長久命の長助」の暗記は彼の自信の根幹を成してきた。

「これ、寿限無寿限無五劫の擦りきれず海砂利水魚水魚末雲来末食来寝るところに住むところや油小路藪小路ばいばいばいばいばのしゅうりん丸しゅうりん丸のぐうりんだいのぼんぼこびいぼんぼこなの長久命の長助や、お前は どうして そんなに悪戯するかえ、人様の頭にたん瘤などこしらえるのかえ、ほれ、この人の頭を見なさいとお母さんは云って、打たれた子供の頭を見たところが、あんまり名前が長いので、名前を云ってしまわんうちに、瘤は引っこんでしまってた」（『糞尿譚』）

長い名前を唱えているうちに、瘤は解消される。たん瘤とは、内出血。「内」に留まり且つ出て行くもの、これも「あいまいさ」の一つだ。一種であり、頭部打撲の際、打撲箇所の血管が破裂して、行き場をなくした血液が皮膚の下一箇所に溜まっていく現象を指す。行き場をなくした血液が集中していくイメージは、本編中で同じように行き場をなくして下流に打ち捨てられる余剰の糞尿のイメージと重なり合っている。小唄と同じく、長い名前を唱えるうちに集中的に溜められたものは解消される。それに同期して、「今に見て居れ」という「執念」（ルサンチマン）に突き動かされていた彦太郎は、瞬間的なカタルシスに向かえ、その長年溜められた「執念」を発散させる。「今に見て居れ」の「今」は、貨幣の多少によって影響を被る事業の成功如何で左右されると考えられてきたが、復讐の先延ばしをやめ、「自分の力」を「今」

信じることですぐさま到来することを彦太郎は感得したのだ。ここに、テキストが「黄金の鬼」と形容する彦太郎の新生があり、貨幣としての糞尿の呪縛からの自由があるのだ。

勿論、この解放は瞬間的なものでしかないことは強調しておかねばならない。糞尿まみれで、「佐原山の松林の陰に没しはじめた夕陽が、赤い光を横からさしかけ、つつ立っている彦太郎の姿は、燦然と光り輝いた」とテキストは締めくくられる。昼でも夜でもない(これもまた曖昧な)夕方の日差しが奇跡的に彼に輝きを与える。しかし、その輝きも所詮沈む太陽の光の反射でしかなく、すぐ夜になれば、そこには只単に糞尿まみれの男が立っているに過ぎず、次いで明日には再び貨幣としての糞尿を巡って相克を続けなければならないだろう。本質的には何の解決にもなっていない。一瞬の祝祭が終れば、糞尿は再び貨幣に縛られ、糞尿の解放を垣間見た彦太郎は、それでも再び「事業」なり「執念」なりに縛られるだろう。その意味で、このテキストはその最後の華々しさにも関わらず、読み手に与える解放感は殆どない。ここに本作の決定的な哀感があることは確かである。

(引用は講談社学術文庫を使用した。引用文内の〔 〕は引用者による注記である)。

(2012.10.01)

火野葦平 『糞尿譚』 小論
<http://p.booklog.jp/book/57997>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/57997>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/57997>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ